

「命のパン」

ヨハネによる福音書 6:41-59

ヨハネによる福音書の特徴の一つは、イエスキリストのなさった力ある業の後に、必ずといっていいほど、その業をめぐる人々の反応が描かれ、対話や論争の形で、その出来事の深い意味が展開されているということです。

このヨハネによる福音書の6章について言うと、1節から15節までの所に、イエスキリストが5つのパンと2匹の魚で、5千人もの群衆を満腹にさせたという奇跡が記され、それを巡って、大勢の群衆がイエスキリストを王にしようとしたということが記されています。

イエスキリストはそれを避けて、ひとり山に退かれ、対岸のカファルナウムに戻られたのですが、その途上で、強い風に阻まれて漕ぎ悩んでいた弟子たちの舟に、イエスキリストが近づき、「わたしだ。驚くことはない」と声をかけられたことを、先週学びました。

その後、22節以下6章の終わり(71節)まで、ほぼ3ページにわたって、パンの奇跡を巡って、ユダヤ人たちや弟子たちとの対話と議論が展開されているのです。その対話と議論を通して、福音書の記者ヨハネは、パンの奇跡の意味をさらに深く解き明かし、イエスキリストこそ、すべての人に永遠の命を与える「パン」であることを明らかにしているのです。

この22節以下は、大変長い箇所ですので、かいつまんで言いますと、パンと魚で満腹した群衆は、イエスキリストを探し求めて、舟で向こう岸のカファルナウムまで追いかけて来て、イエスキリストを見つけて、「先生、いつここにおいでになったのですか」(25)と尋ねたのです。イエスキリストはそれに答えて、「あなたがたがわたしを探しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べたからだ」と語り、「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなた方に与える食べ物である」(27)と答えました。

イエスキリストがパンの奇跡を通して人々に示したかったことは、ただ単に人々の空腹を満たして、みんなの欲求を満足させることではなかったのです。人が生きて行くためには、たしかにパンは必要です。しかし、パンは生きていくための手段ではあっても、目的ではありません。生きるためにパンを食べるのであって、パンのために生きるわけではありません。人間にとって、「生きる」ということは、単なる「生存」とは違うのです。本当の意味で「生きる」とは、人間としての志をもって生きることです。つまり、神さまから与えられている命をどのように用いるか、という課題が人間には与えられているのです。これを「使命」と言います。「使命」という字は、「命を使う」書きますが、与えられている命をどう使うか、ということが私たちに問われているのです。

私たちは何のために生きるのか、何のために働くのか。イエスさまは、ここで「永遠の命」にあずかるためだ、と語り、それを与えるためにこそ、わたしは来たのだと語られたのです。これを聞いた人々が、「何をしたらよいのでしょうか」と尋ねると、イエスは「神がお遣わしになった者を信じることだ」と答えました。つまり、永遠の命に至るパンは、何か働くことによって得るものではなく、イエス・キリストを信じることによって、与えられるものだ、と言われたのです。「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言う人々の求めに、イエスさまは 35 節でこう答えられたのです。

「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」。「わたしはすべての人に永遠の命を与えるために、天から降って来たパンである」と。5 つパンと 2 匹の魚で 5 千にも群衆を満腹させ、さらに 12 の籠に一杯になるほどのパンくず集めたということは、イエス・キリストの与える永遠の命が、どれほど大きな恵みであり、多くの人々を生かす力であるかを示す「しるし」(象徴)であったのです。(残ったパンくずが 12 の籠に集められたということは、何を意味しているのでしょうか？ 12 人の弟子たちに、一つずつその籠を背負わせて、すべての人に永遠の命のパンを分け与える使命を託されたということではないでしょうか。それは、それぞれの教会の荷うべき、務めでもあるのです)。

さて、そういう流れの中で、今日の 41 節以下の記事は、イエスさまの語られた「わたしは天から降って来たパンだ」という言葉を聞いて、人々がつぶやき始めたということです。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのか」と。イエスさまが青年になるまで育ったのは、ガリラヤのナザレという村です。ですからガリラヤ湖周辺の人々の中には、イエスさまの父ヨセフや母マリア、兄弟たちのことまで知っている人々もいたようです。ですからイエスさまは他の福音書の中で「預言者は郷里で敬われものだ」と嘆いたこともありました。ある人のことを良く知っているということは、良い面もありますが、過去の知識が固定観念となって、その人の今の姿を正しく理解できないということもあるのです。イエスさまは 48 節で「つぶやき合うのはやめなさい」と語り、わたしは父なる神から遣わされた「命のパン」であると言われたのです。

この「命のパン」という言葉は、この 6 章で何度も繰り返して述べられていますが、51 節では、「わたしは、天から降って来たパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」と語り、「わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである」と述べています。このイエスさまの発言を巡って、このパンの議論は、さらに新たな方向に展開するのです。

52 節を見ると、ユダヤ人たちが、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせるこ

とができるのか」と互いに激しく議論し始めたということが記されています。「わたしは命のパンです」と言っている間は、人々はこれを比喻として聞いておれたのですが、それが「わたしの肉」のこととなると、あまりにも生々しい表現になってしまいます。しかし、イエスさまはさらにはっきりと語られたのです。「はっきりしておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなた方のうちに命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである」(53)。これは、実に衝撃的な言葉です。今私たちがこれを読んでも、ぎょっとする表現です。

ここには、おそらく、後の教会の「聖餐式」の言葉が反映されているのではないかと思います。聖餐式の原型になっているのは、イエスさまの「最期の晩餐」の場面です。イエスさまは、十字架にお掛りになる前の夜、弟子たちと共に過ぎ越しの食事をされましたが、マルコ福音書によると、「その時、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。『取りなさい。これはわたしの体である』また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになり、『これは多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である』と言われた」(14:22-24)とあります。

この記事は、マタイ福音書にもルカによる福音書にも記されていますが、ヨハネによる福音書には記されておりません。その代わりに、イエスさまが弟子たちの足を洗われたという記事(13章)が記されているのです。おそらく、そのような編集上の意図からだと思われますが、ヨハネはここにイエスさまの言葉として、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得る」と、聖餐式の意義を示されたと思われます。

聖餐式のパンは、十字架で裂かれたキリストの体を意味し、ぶどう酒(ぶどう液)は十字架で流されたキリストの血を象徴するものです。その聖餐式のパンを食し、ぶどう酒(液)を飲むということは、イエスキリストの苦難と死を「わたしのためのもの」として、受け止め、イエス・キリストによって罪赦され、救われた恵みを再確認するという大切な意味をもっているわけです。

ヨハネ福音書の場合には、その救いの恵みを、「永遠の命を得」、「終わりの日の復活」にあずかることとして強調しているわけです。そして、さらに興味深いことに、56節で、イエスさまはこのように述べています。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたその人の内にいる」。つまり主の聖餐は、イエス・キリストと私たちを一つに結び合わせる絆であるということです。イエスさまは、有名な「ぶどうの木のとえ」(ヨハネ 15章)の中で、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしがその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしから離れては、あなたがたは何もできない

からである」(5)とされました。聖餐式において、イエス・キリストの体と血にあずかるということは、このぶどうの木と枝のように、私たちがイエス・キリストにしっかりとつながり、その命にあずかり、永遠の命の実を結ぶことに他ならないのです。

だいぶ前のことになりますが、ある本で、ハンセン氏病を患う方の証しを読んで、深い感銘を受けたことがあります。この方は、昔「らい園」と呼ばれていた収容施設に入れられて、社会から隔離され一時は自暴自棄の状態にあったそうですが、施設の中の教会でキリスト教と出会い、救われたのです。彼は毎日聖書を読んで慰められ、喜びの日々を送っていたのですが、病が進行して目が見えなくなり、自分の目で聖書を読むことが出来なくなりました。けれども隣室の信仰の友が毎日、聖書を読んでくれて、慰められていました。ところが次第に耳が遠くなり、聖書を読んでもらっても、聴き取れなくなってしまいました。彼は失望しましたが、点字を覚えて、点字の聖書を指でなぞってみ言葉を味わうことが出来ました。しかし次第に指の神経も麻痺して、指先で点字を読み取ることが難しくなったそうです。途方にくれた彼は、舌で点字の聖書を舐めて一字ずつ字を拾うようにしてみ言葉を味わったのです。ところが、舌は破れて点字の聖書を赤く血で染める結果になり、長くは続けられなかったようです。彼は完全に聖書のみ言葉に触れる手立てを失って、深い失意に陥ったのです。そのようなある日、ベッドに臥していた彼の口に一切れのパンが差し入れられ、続いてぶどう液がスプーンで注ぎ込まれたそうです。その時彼は「あっ聖餐式だ」と悟ったのです。教会の牧師が訪ねて来られて、病床での聖餐式を執り行ってくれたのです。彼は、一切れのパンとぶどう液を受けることによって、「イエスさまはこの私のために十字架にお掛になり、甦られたのだ、自分はベッドに寝た切りで何もできなくなったけれども、イエスさまは私を見放すことも見捨てることもなく、いつもわたしと共にいてくださるのだ。私はイエスさまの復活の命にあずかり、永遠の命を与えられているのだ」という信仰の確信と生きる望みを与えられたというのです。

聖餐は、そのように主イエス・キリストと私たちを一つに結びつける「命のパン」です。それと同時に、私たちすべての者をキリストにあって一つに結びつける交わりの絆です。

今日は、教会の暦によると「世界聖餐日」です。世界の全ての教会が、プロテスタントもカトリックも含めて、共に聖餐を通して、キリストにあって一つであることを覚える日です。コロナの世界的な感染拡大の中で、聖餐式を行えないことを残念に思いますが、聖書のみ言葉と御霊とによって、深く主イエス・キリストとつながり、主にあつて私たちお互いが一つであることを深く覚えたいものです。

アーメン